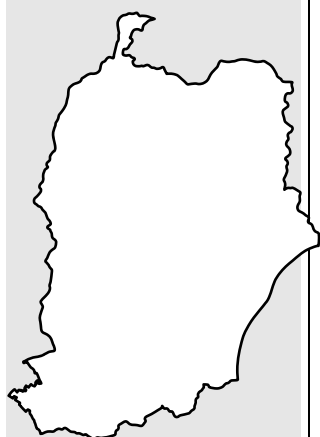


柴田町



柴田町長
滝口 茂



面積 53.98km²
人口 39,190人
(H26・9・1 現在)

●柴田町と阿武隈川

柴田町は、「仙台市」から南へ約25kmに位置し、総面積53.98平方キロメートル。北西部は標高200m前後の山々に囲まれた盆地です。蔵王連峰の雪解け水を満々とたたえる白石川が町の中央部を流れ、町の東南部を流れる阿武隈川と合流して、太平洋に注いでいます。

気候は温暖で、厳寒期でも月平均気温は氷点下になりません。東北地方にありながら雪もほとんど降らず、四季を通じて過ごしやすい地域です。

藩政時代は、伊達騒動で知られる原田甲斐と名門柴田家の城下町として栄えた「船岡」と、仙台藩直轄の穀倉地帯として、また、奥州街道64番目の宿場町として栄えた「槻木」の二つの町が、さまざまな変遷を繰り返したのち、昭和31年に合併して誕生しました。

永い歴史につかわれた柴田には、貝殻層が厚く人面土器で知られる上川名貝塚、県南地方最大規模を誇る縄文中期の深町貝塚や台遺跡をはじめ、大小さまざまな規模の遺構があります。また、藩政時代の貴重な歴史資料とともに往時の商家のたたずまいを色濃く残す「麹屋」など、町のところどころで昔の面影を偲ぶことができます。

白石川堤には、「一目千本桜」が咲き、船岡城址公園の桜とともに県内随一の桜の名所でもあり、平成2年3月に(財)日本さくらの会より「さくら名所百選」の地に選ばれています。また、観光物産交流館「さくらの里」前の駐車場から山頂までは、長さ305メートルのスロープカーが運行しており、眺めはまるで桜のトンネルをくぐるようなイメージです。山頂には、高さ24メートルの船岡平和観音像が立ち、柴田町の町並みが一望できるとともに、はるか蔵王の山々や太平洋の眺望も楽しむことができます。船岡平和観音像は、柴田町出身で東京都住の野口徳三郎翁が、亡妻シズ夫人の冥福と世界の平和と安全の願い、昭和50年10月に建立したもので、当時7千5百万円と1年余の年月を費やしました。

現在、白石川堤と船岡城址公園をつなぐ「(仮)さくら連絡橋」の整備工事を併せて、白石川堤外地親水公園整備が行われ、平成27年4月の桜まつりには、「花(桜)回廊」の回遊が実現します。

船岡城址公園では秋には、「みやぎ大菊花展」が開催され、白、黄色、薄紫色等の見事な菊2,400鉢が県内全域から出展され、毎年NHK大河ドラマにちなんだ菊人形も展示されます。平成25年の秋からは、町民有志の方々が、植栽した彼岸花が5万株を超えたことから「曼珠沙華まつり」を開催するようになりました。平成26年の初夏には、やはり町民有志が植栽したアジサイが1,600株になったことから、「紫陽花まつり」を開催します。冬には、JR船岡駅前での「光のページェント」やJR槻木駅前の「メタセコイアの奇跡」と連携し、レベルアップした「しばた光のページェント」を開催し、船岡城址公園は、年間を通し観光イベントが行われるようになりました。船岡城址公園内には、コミュニティガーデン「花の丘柴田」をはじめ、「百花の園」、船岡中央商店会等による町民手作りのガーデンも整備されました。また、町民が自宅の庭を解放するオープンガーデンもスタートし、官民協働による「花のまち柴田」が少しずつ動き出しています。

平成24年11月には、柴田町観光戦略プラン研究会が組織され、観光物産協会、商工会、シルバー人材センターの職員、県観光アドバイザー等で町の観光戦略についての研究を重ね、平成26年3月に「柴田町観光戦略プラン」が策定されました。観光は、農業や商工業、サービス業などに幅広く関わる総合産業であり、その振興は、地域経済の活性化や雇用を増進させる効果があります。さらにその効果は経済的なものばかりではなく、多くの観光客がやってくることで、自分の住んでいる町への誇りや愛着にもつながるものと思われます。

町の2大観光拠点の1つである「太陽の村」は、標高200メートルの丘陵にあります。昭和52年6月に開村し、



▲阿武隈川河川敷クリーン大作戦



▲白石川 一目千本桜

平成11年1月には、そば打ち体験等ができる食工房、レストラン、研修施設、宿泊施設等を完備した、総合交流ターミナルがオープンしました。広々とした敷地内には約400本の桜があり、春には桜、夏にはバーベキュー、秋には芋煮会、4ヘクタールの広大な芝生ではそり遊びも楽しめます。地元産の米や大豆を使い、農家のお母さん達が手造りしている「ぜいたく味噌」を使った「ぜいたく味噌ラーメン」は、お客様から大変好評をいただいています。町の特産品としては、他に日本国内内陸部では、ゆず自生の北限とされている「雨乞のゆず」があります。皮が厚く、香りが良いことが定評です。「太陽の村」の隣にある「町民いこいの森」には、羽山神社までの全長2.5キロの遊歩道があり、野鳥の鳴き声を聞きながら森林浴とハイキングも楽しめます。

最近では、田園風景や里山の自然空間を楽しむことができる里山ハイキングコースが整備され、山頂からの阿武隈川や近隣市町の眺めが素晴らしく、生涯学習の機会としてハイキング講座も開催されています。

河川環境保全については、水質保全の問題となる生活雑排水の浄化対策として、公共下水道の整備と合併処理浄化槽の普及促進に取り組み、下水道の水洗化率91.4%と普及率も向上しています。また、公共用水域の水質監視として、町内9地点での主要排水路水質検査を実施し、水質保全の確保に努めています。

環境美化活動としては、春は白石川河川敷を桜まつりに合わせ、「おもてなし作戦」として町民、企業等と、秋には阿武隈川河川敷クリーン大作戦として地域のボランティア団体、国土交通省仙台河川国道事務所岩沼出張所の協力により、不法投棄物などの回収、清掃活動を行っています。

平成23年3月に発生した東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所事故で放出された空間放射線量は、人体に影響を与えるような数値は計測されない状況であります。また、温暖化に伴う、近年多発しているゲリラ豪雨などによる気象条件の変化で、一時的に河川が増水し、予測不可能な洪水や堤防の決壊などの発生も考えられます。柴田町は、下流域にありますので、タイムラグがあり、雨がやんだ後での増水には特に注意が必要であります。災害発生時に迅速な対応ができるよう、流域自治体等の連携体制や対応策などの情報共有が重要であると思います。

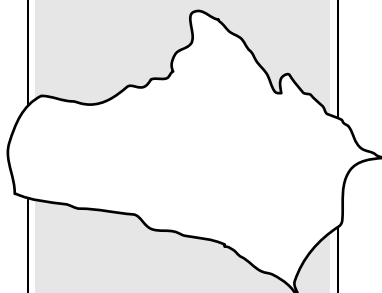
また、河川敷では、昔は野ネズミ等小動物が問題となっていましたが、近年キツネ、タヌキ、ハクビシン等の中型野生動物の被害も報告されておりますので、堤防管理等の面でもパトロール強化や、その温床となる雑草の刈り払い、不法投棄物の回収、監視体制の強化が求められてくるものと思われまます。こうした取り組みは、一自治体だけでは効果を上げることが出来ないものであり、ますます流域自治体の連携強化が重要になりますので、阿武隈川サミットの果たす役割を常時確認していくことが重要であると考えます。しかし、行政の中で出来ることには限界があり、今後も地域住民を巻き込み協働による取組の推進が必要であります。

今後もこの豊かな自然環境を保全し後世に引き継いでいくことこそ、我々に課せられた大きな課題と言えるでしょう。

岩沼市



岩沼市長
菊地 啓夫



面積 60.71km²
人口 43,937人
(H26・9・1 現在)

●岩沼市と阿武隈川

阿武隈川最下流の左岸に位置する岩沼市です。河水が河口から太平洋に注ぐ様子は、世界とのつながりに思いを馳せることができる風景です。しかし3・11の東日本大震災では、津波が襲来し、陸地よりも川を遡る方が早く、白波を立て何度も何度も逆流する光景には、恐怖を感じるほどでした。

河口のあるまちは、今、復興事業の最中にあります。河口から仙台空港まで約10キロに及ぶ海岸線に沿って六つの集落がありましたが、津波ですべて崩壊しました。

現在は、お陰様で集団移転が始まり、新しいまちづくりが進んでいます。堤防も復旧と同時に新たな強化策が講じられるなど、着実な歩みを見せています。

河口は歴史的遺産ともいわれる、日本一の長さを誇る運河・貞山堀との接点でもあり、運河の起点にもなっています。伊達政宗の命により築かれた運河であり、海岸線と並行して石巻まで伸びています。舟運により上流からの物資を荒波の外洋に出ずして陸内で輸送するのが目的の一つだったと言われます。

作家・司馬遼太郎は「街道をゆく」の取材で岩沼を訪れ、真っ先に向かったのが河口と貞山堀が見えるところでした。こうした縁もあり、津波で壊滅状態だった貞山堀沿いの松並木が保存再生されることになりました。

阿武隈川を下ってくれば歴史的遺産との出会いもあります。

●あぶくま文化の育み

川の流に採まれ、岩から砂に姿を変えるように、上・中・下流地域には共通の文化があり、独自の文化も育まれている思いがします。総称すれば「あぶくま文化」であり、舟運の盛んだった時代は、沿川流域の交流は活発だったのでしょう。現在は「阿武隈川サミット」が交流の拠り所と言えます。

岩沼は古くから「武隈（たけくま）の里」とよばれた土地でもあり、阿武隈との関連を想像させられます。また日本三稲荷の一つに数えられる竹駒（たけこま）神社の発音も似通っており、また対岸や上流の地名にも逢隈や大熊などがあり、川由来の関連を類推してしまいます。岩沼市沿川の地名にも阿武隈はもちろん、砂押、水先など川にちなんだ名称も数多く存在します。これも「あぶくま文化」なのです。

岩沼市では、毎年6月に「リバーサイド・プラス」の名のもとに演奏会が開催されています。最下流の地から沿川のまちで活動する吹奏楽愛好者に声掛けして、交流が始まりました。産声をあげたのは平成2年で、運営母体になったのは岩沼、角田、白石、の3市で活躍する吹奏楽団員でした。今年で通算24回を数える定着した音楽交流会になっています。

阿武隈川を交流のきっかけとした一例であり、古くて新しい交流ともいえます。

●水環境としての課題

先人たちの話からは、「水が澄んでいて川藻が生え川魚がいっぱい泳いでいた」と聞かされましたが、その話を伝える世代も少なくなってきました。現状が当たり前の状態だと思う人たちが普通に存在してくると、阿武隈川の水環境に関心を



▲阿武隈川

寄せてもらえなくなる、これは危惧する一面であります。治水、利水、親水、遊水、こうした四つの側面からのアプローチが必要なのでしょう。

東北一級河川の水質状況（平成25年）では、阿武隈水系の荒川が3年連続で第1位でしたが、阿武隈川は19河川で18位でした。震災以降は放射性物質の問題が加わり、親水、遊水の環境から少し距離が離れてしまった感があります。

また河川敷には、環境問題から野焼きがなくなったことにもよりますが、小さい樹木も大木化しているのが目立ってきました。

洪水時に支障はないものか、心配されることです。

●東北三大河川の交流

東北を代表する北上川が約249キロ、阿武隈川が約239キロ、最上川が約229キロの長さであり、日本では5・6・7位にある大河であります。偶然にも10キロずつの違いです。古くから治水に知恵を絞ってきた先人たちの苦労もあり、治水をメインとした期成同盟会などのつながりは今も続けられています。川文化をテーマにした交流は少ないのかもしれませんが、阿武隈川サミットが充実し、東北三大河川サミットのような機会があれば、川の利活用について新しい知恵が生まれてくる期待が膨らみます。

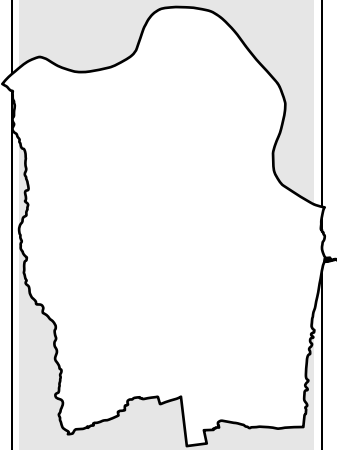
阿武隈川最下流のまち・岩沼は、復興の最中ですが、いずれ川や河川敷が、沿川住民ははじめ多くの方の交流の場に欠かせない場所になってくると思います。

サミット20周年をともに喜び合い、阿武隈川につながりによって、沿川自治体、住民の交流が一層盛んになるよう心から期待しています。

亶理町



亶理町長
齋藤 貞



面積 73.21km²
人口 33,178人
(H26・9・1 現在)



▲阿武隈川河口

●亶理町と阿武隈川

亶理町は宮城県南東部の太平洋岸にあり、阿武隈川の河口に位置する人口約3万4千人、面積73.21平方キロメートルの町で、東北地方では比較的温暖な気候の地域です。本町は東に太平洋、西に阿武隈高地、南は平野部、北に阿武隈川と多様な自然環境に囲まれている町であり、稲作を中心に施設園芸や果樹栽培などの農業のほか、豊かな漁場である太平洋に面していることから漁業も盛んです。

阿武隈川は本町の北西部から東部にかけて大きく蛇行しながら流れ、本町東端に至り太平洋に注ぐ河口があり、河口近くの阿武隈川の沿岸には町並みが形成されています。かつて、この河口は漁港だけではなく、江戸時代初期から江戸向けの仙台藩産米の輸送地、及び阿武隈川上流にある天領から舟運された米の移送地など海上輸送の中継地としても栄え、発展してきました。

明治以降は主に漁港として利用されてきましたが、河口付近では上流から流れてくる川砂が堆積し、航路の変化が激しく、出入港が困難であったことなどから、戦後、河口から1キロメートルほど南にある鳥の海湾内に新しい漁港の整備が始められました。昭和40年頃には漁港の機能は鳥の海湾の漁港に移りましたが、河口の町並みはそのまま残り、小学校や行政機関を有する荒浜地区の中心市街として、鳥の海湾の漁港周辺に形成された町並みとともに発展し今日に至っています。

この荒浜地区が発祥となった亶理町の名物に「はらこめし」が挙げられますが、これも阿武隈川に関係しています。鮭の切身といくらをご飯に炊き込んだ荒浜地区の郷土料理であり、阿武隈川に遡上する鮭を材料としていたため、秋の季節料理でもあります。その昔、阿武隈川河口から塩釜までの海岸線沿いに貞山運河が開削されましたが、この工事臨検のために仙台藩主伊達政宗公が荒浜を訪れた折、地元の漁民が鮭の腹子をご飯に炊いて献上したことが、珍重されるに至った始まりと伝えられています。

地域社会の発展に大きな役割を果たしてきた阿武隈川ですが、本町においても過去数々の洪水により甚大な被害をもたらしてきました。明治以前では文明7年(1475)に河道が変わるほどの大洪水があったとの記録があるほか、寛永14年(1637)にも氾濫により甚大な被害があったと伝えられています。また、明治23年、大正2年の大洪水では、比較的詳細な記録が残されており、被害の大きさを伺い知ることができます。その後、昭和11年から国による堤防の改修が始められ現在に至っています。

●取り組みの現状

水量豊かな阿武隈川は、本町の発展に大きな役割を果たしてきました。藩政時代から水運の中継地や漁港として地域を発展させたことは、先に述べたとおりですが、そのほかにも、農業用水の水源として江戸時代初期から利用され、亶理郡内の耕土を潤しています。戦後、取水施設は昔に作られた位置より下流に新設されましたが、阿武隈川が農業用水の水源として重要なことは現在も変わりはなく、本町の基幹産業である水田農業を支える礎となっています。

また、近年は昭和40年代から始まった上水道事業の水源としても利用されており、上水道の普及が現代の社会発展の重要な要素であることを考えれば、現代においても阿武隈川が本町の発展に大きく寄与していると言えるでしょう。

これら阿武隈川の恩恵を維持するとともに、流域の市町村が力を合わせて環境を保全し、魚の住む川として後世に引き継ぐことは、今を生きる私たちの義務であると思います。また、そのためには、人々が川に親しみを持ち、その環境を保全する意識を持つことが必要であると考えます。阿武隈川最下流の我が町では、漁業協同組合とともに昭和53年から鮭のふ化事業を開始し、今年度は約3百万尾の



▲荒浜地区全景

放流を予定しています。なお、平成4年からは町内の小学生を招き、稚魚の放流を体験学習として実施しており、今回で22回目となります。

●今後の課題

我が町は阿武隈川の最下流にあり、農業用水や上水道の水源としてその利水に依存し生活していることから、水質保全は最も重要な課題です。また、上流部から漂流してくるごみも大きな問題です。河口部の砂州や河口周辺の海岸に漂着するごみは多く、河川や海岸の環境を悪化させる要因となっています。

阿武隈川は長大な河川で支流も多く、広大な流域があります。流域の住民や自治体が力を合わせ、不適切な排水やポイ捨て・不法投棄の防止に対応してゆく必要があると思います。

●未来へのメッセージ

本町では毎年7月の第1土曜日を巨理町一斉清掃の日とし、町民のほか町外からのボランティア、町内外の企業などと協働で、道路や公園などでポイ捨てごみの収集や環境美化活動を行うほか、阿武隈川河口や海岸での漂着ごみの収集を行っていました。震災後は河口や海岸の清掃は休止していますが、震災以前は、河口部の清掃に阿武隈川サミットの構成市町村からも毎年多数のご参加をいただいていたところです。これら河口部や海岸部の清掃についても将来は再開したいと考えています。

また、平成22年4月には巨理町環境基本計画を定め、町民・事業者・町がそれぞれの役割を担い、環境問題について協働で取り組むべきことがらを示させていただきました。その中で、阿武隈川の環境保全については、上流部の自治体や関係機関と協力して取り組むものとしており、その推進にあたり阿武隈川サミットは重要な存在であり、今後もその活動に期待するものです。

最後に、平成23年3月11日の東日本大震災では本町の東半分が津波により浸水し、特に河口のある荒浜地区を含め、海岸部の地区は壊滅的な被害がありました。震災から3年余を経た現在は阿武隈川の堤防工事を始め復旧工事が進んでおり、また、甚大な被害のあった荒浜地区の町並みも復興事業による再編の緒についたところです。震災に際し、ご支援やご協力をいただいた方々や自治体、関係機関の皆様に対し、この場をお借りして御礼申し上げる次第です。